

# 湿地の生物多様性保全と持続的地域づくりに関する 日欧共同ワークショップ・シンポジウムが豊岡で開催されました

10月5日・6日の2日間、日本とヨーロッパ各国から研究者27人が豊岡を訪れ、コウノトリ野生復帰の取組みが進む市内を視察し、市民と交流されました。6日には城崎総合支所で公開シンポジウムが開催され、湿地再生の研究・取組み報告の後、参加者と意見交換が行われました。

《問合せ》コウノトリ共生課



県立コウノトリの郷公園などを視察する一行

「豊岡は宮崎 駿さんのアニメに出てくるような風景だ」

豊岡を訪れたのは、東京大学COE生物多様性・生態系再生研究拠点が主催する研究活動グループで、日本とヨーロッパが共同して湿地の保全再生をめぐる生態学的・社会的・経済学的課題に取り組まれています。

日本からは東京大学の鷲谷いづみ教授をはじめとする研究者、環境省、日本雁を保護する会など13人が、ヨーロッパからはドイツ、ポーランド、イギリス、オランダの研究者14人が参加されました。

このワークショップ・シンポジウムは7月にドイツで開催されており、中貝市長もコウノトリの取組みを現地で講演していますが、日本での会場としては北海道の豊富町（サロベツ湿原）と豊岡市が選ばれました。

5日は朝から夕方まで、6



ドイツで講演する中貝市長

日は午前中、県立コウノトリの郷公園、加陽の堤外田、戸島の湿地計画地などを精力的に視察されました。

コウノトリの郷公園前の田んぼでは、コウノトリの郷営農組合組合長の「悦喜さん」から「コウノトリ育む農法」の説明を受けました。視察者一同は、田んぼに肌で触れ、改めておいしいお米と一緒にたくさんのお米を育てている様子を実感されたようでした。

イギリスの東ロンドン大学教授のリチャード・リンゼイさんは「日本には何度も来て

いるが、豊岡のようなところは初めてだ。宮崎 駿さんのアニメに出てくるような風景で、感銘した。農家も田んぼに生きものを増やしてコウノトリの野生化に密接に協力している。しかも、成功例を具体的に見ることができるのが素晴らしい」と話しました。

また、純日本の生活様式の残る平尾源太夫さん宅や久比神社にも立ち寄り、日本文化も満喫されました。

八角堂（城崎町楽々浦）では、「自然湿地と人工湿地」をテーマにワークショップが行われました。



平尾源太夫さん宅で説明を受ける参加者

## 日欧共同シンポジウム 「湿地の自然再生による地域づくり」

6日の午後からは、城崎総合支所で市民ら約100人が参加して「湿地の自然再生による地域づくり」をテーマに公開シンポジウムが開催されました。

冒頭、あいさつに立った中貝市長は、「コウノトリを野

生に帰す物語は、国境を越えて心を打つ。湿地再生という本日のテーマも、日本・ヨーロッパ共通の課題である。大いに議論された後は、城崎温泉で心身を癒していただきました」と話しました。続いて、ベルリン日独セン



日欧の研究者が一堂に会し開催された公開シンポジウム

ター事務総長のフリデリケ・ボッセさんは、「生物多様性の保全などの課題を解決する

には国際的な協力はもちろん、国内でも国レベルと地域レベルの協力体制の確立が必要。この会議での議論を通じて、両国で持続的な発展や生物多様性の保全に役立つ新しいアイデアや方策が生まれることを期待したい。豊岡の湿地再生の現場を見て、豊岡が日本での会場に選ばれた理由が理解できた」と語られました。

シンポジウムでは、環境省の生物多様性地球戦略企画室室長の亀澤玲治さんから「第3次生物多様性国家戦略の策定の概要」について、市コウノトリ共生課長の佐竹節夫からは、「豊岡での湿地再生の取組み」について報告がありました。また、ドイツ連邦自然保護局課長のホルスト・コルンさんからは「ヨーロッパにおける生物多様性の保全および持続的利用に向けた総合的アプローチ」について、オランダ・デルフト水理学研究所のヒューゴ・コープスさんからは「オランダの人工湿地」についての講演がありました。

### 豊岡の水田の威力に感動



物生谷 生再鷲  
E系の  
O態表  
C・代  
学・点  
大性・  
京様・  
多研・  
東いづ  
多み

農地でありながら、あれだけ豊かに生きものを育む「水田」の湿地としての威力に、ヨーロッパからの参加者も気付けてくれたと思う。「豊岡の水田をフィールドに学生に研

究させたい」と話すドイツの研究者もいた。公開シンポジウムでは、学術的な集まりなのに大勢の方に参加していただき、熱心に議論に加わっていただいたことに感銘を受けた。豊岡の人たちの温かいおもてなし」に大変感動した。日欧共同ワークショップの最後を豊岡で飾れたことを大変うれしく思うとともに、皆さんの協力に心から感謝します。

報告を踏まえた総合討論では、「生物多様性保全の予算は？土地確保の方法は？昔のように農業に牛を使っては？」など質問や意見があり、日欧の参加者によって湿地に関する研究が深められました。ドイツのレーゲンスブルグ大学教授のポシュロド・ペータさんは、「湿地再生の取組みは、湿地の保全のためだけに進めるのではなく、経済や社会・文化との両立が大事になってくる。豊岡の取組みは日本のお手本だし、世界のお手本にもなる。今後毎日欧で知見を共有し交流していきたい」と、感想を述べられました。最後に、司会のドイツ・ギンセン大学のホーテス・シュテファンさんの「日本とドイツには共通点が数多くあり、今回のように交流を進めることもできる。さらに交流を深めましょう」との呼びかけで、シンポジウムは幕を閉じました。

市では、今回の交流で得た人のつながりと知識を貴重な財産と位置付け、今後のまちづくりにも効果的に活かしていきたいと考えています。